
逆ハーっ子 が あらわれた！（仮） 番外編

片岡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆ハーっ子が あらわれた！（仮） 番外編

【Nコード】

N1867Y

【作者名】

片岡

【あらすじ】

『逆ハーっ子が あらわれた！（仮）』の番外編。

私たちがなんとなく思いついた話や、書きたかったけど載せられなかった話なんかを書いていきたいと思います。

更新は不定期。思いついたら即載せます。

本多、素晴らしい人材を発見する（前書き）

本多が大和に付き纏うようになったきっかけのお話。

本多、素晴らしい人材を発見する

本多はその瞬間、雷をその身に受けたような衝撃を受けた。

ふらふらとした足取りで二、三步後退り、ついには崩れ落ち、廊下に座り込んでしまった。通行人たちはそんな本多を見て、迷惑そうな顔をしている。

だが、本多はそんなことに構ってられないほどの、ショックを受けていたのだ。

本多の目は、廊下に張り出された紙に釘付けになっている。そして、震える唇を開いた。

「ボール投げで俺の記録を越した男がいる……だと……！？」

本多が見ていた紙とは、体力テストの記録が載ったものである。全校生徒が載っている、というわけでは勿論無く、各種目毎に素晴らしい記録——つまりとてころ最も優秀な記録——を打ち出した生徒の名とその記録が記されているのだ。

三年、二年はあまり知らぬ名、もしくは野球関連でよく知っている名がある。そして、一年の記録は一人の男が独占していた。

この間、行われた体力テスト。そのテストの中の一項目であるボール投げ。そのテストで本多は自己ベストを越す記録を出し、その記録に絶大なる自信を持っていた。よもやこの記録を越せる者などいないだろう、と。

だが、その自信が呆気なく崩されるなど、いったい誰が思っただろうか。少なくとも、本多は思わなかった。

本多は酷く自尊心を傷付けられていた。そして同時に、三つの頃から野球だけをしてきた自分の記録を抜いたその男に、興味を持っていた。

さぞかし名のあるスポーツマンなのだろう。野球では聞いたことがない。それなら、別のスポーツか。

しかし、そんなことは関係ない。なんとしてでも引き抜き、我が野球部に転部させてみせる。

「待っている、広崎 大和……！ ふははははっ……！」

突如高笑いし始めた本多を、通行人たちは不気味そうな目で見ていた。

「広崎 大和はいるか……！」

迷惑なことに教室の出入り口のと真ん中に仁王立ちし、自分の名を大声で呼ぶ坊主頭。大和は思わず昼食の焼きそばを詰まらせた。ぐぐと呟いた大和の背と一緒に昼食をとっていた友人が擦つてくれた。ありがとうと礼を言って、大和は坊主頭のもとへ向かった。

「……俺が広崎 大和だけど、何か用か？」
「ほお……、お前が広崎 大和か。俺は本多 高志だ」
たかし

自棄に自分の身体つきをじろじろと見てくる本多。大和はなんだか居心地が悪かった。

そして、本多は単にスポーツマンとしての大和の筋肉の付きかたを観察していただけなのだが、ちよつとした誤解をした人間も少なくはなかった。

「広崎 大和！ 俺と共に昼食を食え！」
「……？ なんで？」

この瞬間、誤解をした人間の中の小さな疑念が、確信へと変わった。

「広崎！ 行かねーほうが良いって！ 危ねーよこいつ！！」
「大和くん！ こいつなんかよりも私たちとご飯食べようよ！」
「う……うん……？」
「つーか、待て待て！ 大和は俺らと一緒に食ってたんだって！」
「な、なんだお前たち！ 邪魔をするな！！」

本多の叫びも空しく、遂には教室の外へ追い出されてしまった。ドアには勿論鍵がかけられていた。

懲りずにまた大和のもとへやってきた本多が、何時の間にやら結託したクラスメイトたちとの間で静かな、されど激しい戦いが繰り広げられるのは、また別のお話……。

本多、素晴らしい人材を発見する（後書き）

大和はきつとクラスの人気者。

淡い恋心が引き起こした悲劇（前書き）

うつかり「あんこが食べたい」と言ってしまった小百合に起きてしまった悲劇。

淡い恋心が引き起こした悲劇

四時間目の授業終了を知らせる鐘になる。

早速昼食をとろうと弁当を取り出した小百合のもとに、男共が弁当と机を持ってやってくる。いつものことだ、と小百合は笑顔で迎えた。

小百合の周りに集^{たか}ってきた男共の中の一人が、不意にこんなことを言った。

「小百合ちゃんって、どんな食べ物が好き？」

「食べ物？」

小百合はきょとんとして、考えた。好きな食べ物、余り考えたことがなかった。

“前”のときはそんなことを気にしている余裕は無かったし、今は好き嫌いではなく、栄養豊富で美容に良いものを選んで食べている。

悩み始めてしまった小百合を見て、今度は違う男が言った。

「あ、好きな食べ物じゃなくてもさ！　なんか……、今食いてえものとか無いか？　俺、買ってきてやるよ！」

その言葉に、周りの男共が目を光らせた。そうか、それが狙いか、と小百合は何故突然あんなことを訊かれたかがわかった。言ってしまうえば、男共は小百合に貢いで好感度を上げてしまおうと思っているのだ。決して鈍いわけではない小百合はすぐにその意図に気が付いた。

「うーん、今、食べたいもの……」

考え込む小百合の思考に、ある一人の男が割り込んだ。最近は何か考え事をしていると、すぐにあの人のことを考えてしまう。だが、それは決して不快というわけではなかった。寧ろ、心地が良い。

初めて知った恋というものに小百合は酔い痴れていた。

そして、はたと思いだす。

そういえば、大和の好きな食べ物は何と菓子だったはず。何故か購買にジャムやら餡やらが大量に置いてあったのを見たことがある小百合は、呟いてしまった。

「あんこが、食べたいなあ……」

大好きなあの人、大好きな和菓子のうちである餡。少しでも、大和と同じものを共有出来たら。小百合はそんな可愛らしい乙女心から、自然にそうこぼしていた。

そして、そんな小百合の恋心が後に悲劇を起こすことになるうと

は、そして、大和の好感度を下げてしまうことになるうとは、このとき小百合は思いもなかったのである。

淡い恋心が引き起こした悲劇（後書き）

私の書く小百合は阿呆だった。

この後大量に餡を持ってこられた小百合は困惑します。

プリン事件〜愛しの君は今いずこ〜（前書き）

タイトルは適当なので気にしないで下さい。

12話にちよつと出てきた話題の番外編。冒頭の文は13話から。ちよつと疲れたから三人称じゃなくて一人称で行きます。シリアス調なのは仕様。

プリン事件／愛しの君は今いずこ

大和は横目で美穂の手元を見ながらボウルの中身を混ぜる。こいつは相変わらず本当に不器用な奴だ、と思った。

そういえば、とふと思い出す。

前に一度、美穂とプリンを作ったことがあった。

あのときはまだ俺たちは少し子供で、何が正しくて、何が間違っていたかなんて、わかりもしなかった。

だから、だからあんな間違いが起こってしまった。

大人たちは誰も悪くないと言って、笑い、誤魔化した。誰もがその言葉に納得した。当事者であった、美穂でさえも。

だけど、俺はそうは思えなかった。

仮に美穂は悪くなかったとして、それでもやっぱり、俺だけは罰されるべきであったのだと思う。

たった一つの、かけがえのない命を奪う、その一因となってしまう、罪深い俺だけは。

七年前、ある暑い、夏休みのことだった――。

俺たちの歳の頃は一年を十回重ねただけの齢で、それでも二人きりの留守を任されるには十分な歳だった。

俺は遊びに来た美穂と暫くトランプなどの部屋遊びで遊んでいたが、唐突に飽きてしまった。

何か面白い遊びは無いかと思案する俺の頭に、名案だと思われるものが浮かんだ。

だが、それが間違いだったのだろう。

「美穂！　一緒にお菓子を作ろう！」

「お菓子？　うんっ！　作る！」

提案すると、美穂は目をきらきらと輝かせて賛成した。

聞くと、菓子を作るのは好きだが、危ないからと母親に禁止されていたらしい。

その言葉の真意に気づくことが出来ていたならば、悔やんでも、悔やみきれない。

話し合った結果、子供たちだけということもあり、簡単に作れるプリンにした。多少火を使う工程もあるが、俺は料理が得意だということもあり、母親からは容認されていた。

カラメルソースを作り、プリンの本体を作り、蒸し焼きにする。

美穂は待ちきれないようでそわそわしながら、キッチンとリビングを行ったり来たりしていた。

二つのプリンが入ったカップを見て、そろそろ頃合いだろう、とプリンを取り出す。

パツと顔を輝かせた美穂が駆け足で近寄ってきた。

「出来たの!？」

「うん、出来た。あとはカップから取り出すだけだ」

そう言いながら食器棚から小ぶりの皿を二つ取り出し、一枚と飾り付けのさくらんぼを美穂に手渡した。

視線を自分のぶんのプリンに戻し、皿に開けた。プルンとその滑らかな美しい身体をくねらせ、プリンが姿を現した。

カラメルソースもちゃんとついているし、美味しそうだ。俺はさくらんぼを中心に落とした。

出来栄えに一人満足していると、びちゃあ、という不可解な音と、浅い水溜りの中に何かを落としたような音。

俺は音の発信源を見た。

「あ、ああっ……!!」

悲鳴のような、声が漏れた。

美穂は震え、泣きそうな顔でプリンになるべきだったものを見ている。言い知れぬ焦燥に襲われ、思わず呼吸が乱れる。

「ぶ、プリン……」

美穂が涙にぬれた声で、ただそれだけを吐き出した。

なんで、どうして、どうしてこんなことになってしまったんだ。

俺は涙で揺らぐ視界を閉じて、必死に考えた。

なんで、なんでなんでなんでなんで！！

ああ、痛い、どうして、なんで。俺たちがいつたい何をしたというのか。いや、悪いのは、俺か……？

狭く、不透明な黄色い海に浮かんださくらんぼが、目に焼き付いて離れない。

思わず思い出されたやるせない気持ちを首を振って追い出す。
やめろ、忘れる。いいや、忘れちゃいけない。悲しみもとっておいて、捨ててよ、違う、駄目、傷も残すの。癒して、駄目だよ。だって、

「赦されて、ない」

何か、大事なものを失ったときの、あの虚無感に似ていた。

彼女（彼でも可^{プリン}）を殺めてしまったときに感じたのは、まさしくそれだった。

そう、そうだ。きっと、大事だったんだ。大切だったんだ。彼女は、俺の大切な。

責めるように、哀しむように俺を見上げていたあの赤は、今でも

鮮明に、まるで昨日のことのように思い出せた。

プリン事件、愛しの君は今いずこ（後書き）

大和はきつとお菓子に命懸けてる。

美穂、忘れられない思い出（前書き）

片岡の友人が書いたもの。

20 パソコン部女子の番外編ですね。

美穂、忘れられない思い出

椿について副会長と大和の討論が飛び交う。大和は友達思いの良い奴だ、昔私がいまだ人とは話さないタイプだったのにいつも話に来ていた。懐かしい、と目を細める。美穂はそのまま思い出に浸り始めた。

……

美穂は今でこそ普通に人に話しかけているが昔は人見知りな面があり、あまり外では遊ばなかった。そのため友達ができなかった。自然と美穂は友達と話すより本を読んだほうが楽しいと思いこみ、さらに人との関わりを隔てた。小学校に入っですぐくらいだっただろうか。昼休み、いつも通り本を読んでいると一人の男の子が話しかけてきた。

「きみ、なにしてるんだ？」

「……え？」

本から顔をあげると男の子が正面に立っていた。この子は同じクラスの子だった。この男の子が大和なのだが美穂は自己紹介の時に全く聞いてなく、美穂自身がボソボソと自己紹介をしたためにあまりお互いによく知らなかった。

「読書だよ」

「へえ、つまらないのか？」

「うん」

即答した美穂に大和はキョトンとしたが直ぐに笑い始めた。それを美穂は少し引き気味で見ていた。

「面白いなあ！ きみ、名前はなんて言うんだ？」

「坂田、美穂」

「ふーん、おれは広崎 大和。よろしくな」

「広崎、くん」

人の名前なんてそんなに口にすることが無かった。なんだかちよつとぎこちないがそれでも呼んでみた。

「大和、で良いぞ」

「や、大和……」

それを聞いて満足したのか大和はにっこりと笑って頷いた。

「よろしくな、美穂！」

「よ、よろしきゅ」

「あつはつはつは！ “よろしきゆ”！？」

「っ、うるさい〜！」

この日から美穂には友達ができ、更に親友ができた。

.....

一瞬であの日のことを手に取るように思い出した。あの日のことは今でも忘れられない。それだけ美穂には嬉しい出来事だった。

「だいたい、どうしてお前は人の友好関係をそう歪んだ目でしか見れないんだ！」

大和の声が聞こえた。本当に良い奴だな、と美穂は心から思った。

もしも皆のキャラが違ってたらく大和編く（前書き）

勿論キャラ崩壊です。完全な悪ふざけです。私の自己満足です。だ
いたい痛々しくなる予定です。

もしも皆のキャラが違ってたらく大和編く

もしも大和がめちゃくちや毒舌だったら

教室に迫り来る大きな足音。運悪くクラスにいた人間たちはため息を吐き、大和を見つめた。そうして、口々にこう言うのだ。

「あんまり酷いこと言ってるなよ」
「本多くんだってさ、悪気があつてのことじゃないと思うの。ね？」
「まあ、確かにムカつくのはわかるけどさ、もうちょっと抑え目にな」

大和はにこにこしながら頷いた。クラスメイトたちがほっと安堵の息を吐いた頃に、そいつは現れた。

「広崎ー！ 野球部に入れー！」
「誰が入るかこのゴキブリ野郎」

あれ？ 抑えてなくね？ クラスメイトたちの心情が一致した瞬間だった。

こんなことは日常茶飯事なため、少し怯んだが、本多はすぐに勢いを取り戻し、また言った。もう頼むから諦めてほしい、と宮城は思った。

「つそ、そんなことを言われて引き下がる俺ではない！ お前のその才能は我が野球部でこそ光り輝くものなのだ！ だから、広崎……」

「その喧しい暑苦しい声で何度も人の名を叫ぶなよ節足動物以下のゴミ虫め」

抑えてない！ 抑えてないよ広崎くん！ しかし、この大和の一方的な罵声を遮れる者など、今この場にいるわけがなかった。

「だいたい何度も断っているのにどうしてまだお前は諦めないんだ？ しつこさは何度駆除しても現れる害虫並みだな。尊敬する。見習いたくはないけれど」

大和は先程から笑顔を全く崩さず毒を吐き続けている。恐ろしい子……！

容赦無く毒は本多の心を傷付けるが、まだ引き下がらない。

「さ、さつきから人を虫扱いするとは何事か……！」

「じゃあ、何か。お前は虫ではなく、虫以下の存在なのか？ それは申し訳ないことをしたな！」

「いや、だからそうじゃなくてだな、」

「どうして生きてるんだ？ どうして其処にいるんだ？ お前なん
て誰にも必要となんてされてないのに。さっさと産まれた星に帰れ
よ」

本多は泣いた。

もしも皆のキャラが違ってたらく大和編く（後書き）

毒舌具合が生温いですね。

「はいっ！みんなのアイドル、大和くんだぞっ」
「っていうのも考えてたけど痛々し過ぎて書けなかった。」

もしも皆のキャラが違ってたらく本多編く

「っだから俺は野球部に入らないって言ってるだろう!? このハゲ!!」

「広崎!!」

「なんだ!!」

「も、もっと……、もっと詰^なめてくれ……!!」
「……………」

もしも本多がドMだったら。

「広崎! 野球部に入れ!」

「嫌だ! いい加減しつこいぞ! このハ……………」

「駄目だって大和!! それだけは言っちゃ駄目だって!!」

「え……、あ、そ、そうか……。ごめん……。俺が悪かったんだ……」

「……………な、なんだ……?」

もしも本多が本当にハゲてたら(鬘着用)。

もしも夏輝？ 菖蒲前提で、夏輝↑本多で、本多が病んでたら。
←

「……夏輝」
「い、たっ……！」

本多は夏輝を床に叩きつけた。軽い音を立てて、夏輝の伊達眼鏡が跳ねた。割れていないと良いな、と夏輝はぼんやりとする頭でそう思った。

本多は、何故自分が大切な幼馴染の一人である夏輝にこんなことをしてしまったのかが、わからなかった。ただ、夏輝と菖蒲が話していて、笑い合っていて、穏やかで、それに無性に腹が立って。

「ッ……くそ……！」

今思い出しても腹が立つ。黒い何かが心の臓を突き破り、腹の中で暴れまわっているような、そんな胸糞悪い気分。本多は壁を蹴った。少しだけ壁に輝^{ひび}が入り、破片が飛ぶ。

そう、腹が立ったのだ。だから、無理矢理夏輝を教室の外へ連れ出した。夏輝は少しだけ諦めのような表情を浮かべて、本多に引き摺られていた。

実は、昔からこんなことはよくあった。夏輝と菖蒲は親友、いや、それ以上に仲が良かった。可愛い幼馴染たちの仲が良好なのは本多にとってとても好ましいことのはずなのに、それにいつもどうしようもないくらいに嫉妬してしまう。

「っな、んだよ、高志っ……」

少し痛む身体を持ち上げ、本多を見上げた夏輝。堪え、笑うその表情は痛ましく、それ以上に愛おしくて堪らない。ぞくりと背を何かが駆け上がる。それが興奮だと気付いたのは、いつだったか。本多は夏輝を抱き寄せた。

「夏輝……。夏輝、夏輝夏輝夏輝夏輝夏輝」

「ん、あたし、此处にいるよ」

耳元で、低く、心地の良い声が自分の名だけ呼び続ける。夏輝はいつの間にか、恐怖という感情よりも悦びのほうに勝っていた。こんなにも、歪んでしまうまで自分を真っ直ぐに想ってくれる男がいて、嬉しくないと感じる女が何処にいるのか。

本多は夏輝をじっと見た。茶の混じった黒い癖っ毛。指を通すとその髪は意外なほど滑らかだ。

菖蒲と共にいるせいで霞みがちだが、夏輝は美人だ。猫のような目は悪戯っぽく、屈服させてやりたい気持ちに駆られる。

本多は衝動のままに夏輝に口づけた。夏輝は目を閉じ、黙ってそれを受け入れた。

きつと、もうすぐ壊れてしまうよ。

誰かが、頭の中で囁いた気がした。壊れてしまふ。それはいい、なんのことだろうか。

もしも皆のキャラが違ってたらく本多編く（後書き）

見ちゃったんですか……。ちょっとアレなんで下げてたけど。
本多尽くし。

今んとこ此処が一番恋愛してる。

多分最後のこの設定だったら最終的に本多？夏輝？菖蒲になると思う。
なにこれ怖い。

三人で、一緒だもの（前書き）

“ 36 パソコン部女子”の番外編。
本多？菖蒲

もう本多と夏輝と菖蒲は三人でくつつけばいいよ。
あ、片岡が書きました。

三人で、一緒なもの

苦しい。寂しい。悲しい。痛い。妬ましい。恨めしい。憎い。

私の中の、汚くて、醜い感情。どろどろに濁って、腐り落ちた負の感情。

こんな私、嫌われて当然。でもね、苦しい。

「たか、し……、たかし……」

「菖蒲、大丈夫だ。俺は此処にいる」

高志は優しく微笑みながら、私をぎゅうぎゅうに抱き締めてそう言ってくれた。

もっと、もっとと言って。いつもと違う、優しい声で囁いて。私を繋ぎとめてちょうだい。

生徒会室でこんなことをしているなんてばれたら、どうなるんだろう。

性交渉をしているわけじゃない。でも、異性とこんなことをするのは校則違反で。ううん、そんなこともわからなくなるくらい、どろどろに甘やかして。

あつたかくて、私とは全然違う大きな手が、私の頭を撫ぜた。自分のものじゃない体温が、酷く心地好い。

高志は私の眼鏡を取って、私の額と高志の額をくつつけた。高志の真っ直ぐな瞳が私を貫く。

眼鏡は板書るとき少し大変だからかけているだけ。なくても日常生活には困らない。

「ねえ、高志……」

嫌われてしまうかもしれない。そんな不安を押し込めて、私は口を開いた。高志は切れ長の瞳を少し瞬かせた。

「なんだ？」

「私、私ね、」

言葉に詰まる。でも、駄目。黙っていたら、きっともっと嫌われる。

「嘘を、吐いたの」

一瞬だけ、音が無くなった。高志は驚いたような顔をしていた。私は無性に怖くなって、口を開く隙も与えないように捲し立てた。

「私は悪い子？ あの子に嘘を吐いた私はいけない子？」

高志は私を抱き締めたまま椅子に座った。必然的に私は高志の身

体の上に乗り上げる形になるわけで、少しだけ恥ずかしい。思わず顔を赤らめると笑われた。

「何を言うか。人は皆嘘を吐くものだ。嘘を吐いたことがないなんて言う者がおつたら、それこそ嘘つきだ」

小さな子供を宥めるみたいに、背中や頭を一定のリズムで撫で擦られて、眠気が襲う。ぼんやりとしかけた頭を無理矢理覚醒させて、今度は私から高志に抱きついた。

「そう。そうね、そうよね。私、……悪くない？」

「悪くない！ お前を悪く言う人間がいても、俺が無理矢理正しいものとして変えてしまおう」

春のお日様みたいにかりと笑った高志。あつたかい。そつと呟くと、高志は喉を鳴らして笑った。

いつもあんなに騒がないで、こんなふうに落ち着きを見せれば、きつと高志はみんなの人気者になってしまうと思う。

だから、このままで良い。素敵な高志を知っているのは、私と夏輝だけで良いの。

“彼女……、椿さんが来てから、この学校は変わった。きつとね、彼女が悪いわけではないの。でも、彼女を切っ掛けとして、学校が崩れ始めた”

ねえ、私、嘘を吐いたの。

彼女が悪いわけじゃないって、わかってます。ねえ、これは本当でもね、そのことに納得出来ているわけではないわ。

だって、そうでしょう。

いきなり現れて、同性の私から見ているからかもしれないけれど、魅力なんて一欠片も感じない女性。そんな人に、友達を奪われて、大好きな学園をめちゃくちやにされて。

私、悪い子だもの。良い子ではないもの。

だからね、あの子嫌いだよ。消えてしまえば良いのに。

「大丈夫だ」

此处にいる、と高志はまた私を抱き締めた。なんだかもうすぐで夏輝が来るような気がする。

私たち、いつも三人で一緒なものね。私たち、いつも一緒にいなくてはいけないのだね。

ねえ、お願いね、椿さん。

「高志と夏輝だけは、取らないでね」

そうしたらあなた、消してしまうわ。

三人で、一緒だもの（後書き）

ぐっだぐだ（笑）笑えるくらい、ぐっだぐだ。下書きも無しに書いたからかな。

そして菖蒲がヤンデレ。ヤンデレ率高いよ。そんなんで大丈夫か。だいじょばない。

パソコン室にて

「んお？クッキーか、これは」

「え、本当ー？」

「クッキー……、食べ物！？何処……？」

只今パソコン室。ちなみに今日いる部員はデストロイヤー白川、トブルメイカー町谷、スリーパー矢崎、そして美穂である。

ちょうど用があつた三人が都合よく居てくれた。美穂にとってはとても有り難い。

「私が作つたのよ」

この発言をした瞬間、まるで吹雪がきたかのようにぶると三人が震え、集まって話しはじめた。

待て、私はそこまで爆弾発言をした覚えはないぞ。

「嘘っ？！先輩が料理を………？」

「有り得ない、こんな事があつてたまるか……！」

「むにゃ、天と地が反対になつてもありませんよ」

「言い過ぎじゃない？」

確かに料理は出来ないがなんでそこまで言うかな？

美穂は今すぐ殴り倒してやろうかと考えたが、いや、今はまだその時じゃない、と我慢をした。

「なら、食べなくてもいいよ」

「いや、貰うぞ」

「うん、先輩って意外に出来る」

「むう、私も食べたい」

なんだその態度。頑張って作ったのにそれは無いだろう、それは。しかも町谷、『意外に』って何よ。明らかに馬鹿にされてる気がするんだけど。

「『『いただきます』』」

サクッ

「ん、サクサク感が良いな」

「うわお！！先輩おめでとございます！」

「むに。それでいてこの味も、……………？、！？！」

突如、口を押さえて悶絶しはじめる三人。

美穂はそれが終わるのを黒い笑顔で見守っていた。

なんとか治まったのか一番に回復した矢崎が口を開く。

「う、はあ……、何入れたんで、…ゲホッ、すか」

「んー？何て事無いでしょ？」

「何を、入れたか、聞いて、いる…」

こっちも治まりはじめたのか、途切れ途切れになりながらも話す白川。

「唐辛子、胡椒、ハバネロ、タバスコ……」

「ちよつ、先輩、それクッキーの材料じゃない!!」

「知ってるけど」

笑顔で復活が最も遅かった町谷を見返した。町谷は青ざめて後ろに下がった。

「文化祭、サボったでしょ」

ジトリと睨みつけてやると、急にしどろもどろになった。

「あ、あれは…、その」

「ああ、うん、あれなんだよね」

「……ぐう」

「寝たふりするな」

「ぐふうっ!？」

言い訳二名、ごまかし一名、ですか。

誰か認める代わりに謝ろうとかそういうこと、考えないかね…。

なんだかこの部活が酷い部活に見えてきちゃったよ。どうにかしてよ、部員達。

「完食するまで、帰さないから」

「「「そんなあ…」」」

ガツクリと肩を落とす部員達。ざまあみろ。

暫く食べるのを待ったが、あまりにも食べようとしないので口に押し込もうか、と美穂が思い、実行しようとした時だった。

「やつほー。部活やってるー?…なんか暗いな」

「部長。会長は今日が良いんですか」

「菖蒲、仕事でねー」

はは、と笑っている部長。いつも思っけど会長はこんな部長は、迷惑じゃないのだろうか。会長、迷惑だったらごめんなさい。

「お!それってもしかして、もしかしくてもクツキー?」

「そうだけ、」

「いただきます」

「……………」

人の話は無視か、と思って今部長が持っているクッキーがどんなものかを思い出す。

「部長！！それはダメ……………」

「んー、スパイシー。良い味だね。誰が作ったの？」

「…は？、え、私だけど」

「へー、副部長、やれば出来るじゃん」

「……………はあ、ん、…え？」

部長はやはりミステリアスだ。
美穂は改めてそう思った。

パソコン室にて（後書き）

あんまり知らないけど辛いものって結構ある。
……よく食べれるなあ。

実は、大和たちの通う学園には“伝説の木”と呼ばれている木が植わっている。伝説などと言うからには勿論それは普通の木などではなく、それらしい言い伝えがある。

見た目は至極普通の木だ。しかし、その木の下で告白し、見事玉砕した者にはそのすぐ後にまた新たな“縁”が現れるという良いのか悪いのかよくわからない言い伝えがあるのだ。

いつからそのような言われていたのかは誰も知らない。とにかくにも学園の敷地内にその“伝説の木”は植わっていて、そんな言い伝えがあった。

ちょっと微妙な言い伝えのせいかな真しやかにその伝説は囁かれるだけに留まっていたが、珍しく、告白の為にその伝説の木の下にある男子生徒を呼び出した女子生徒がいた。

男子生徒は我らが阿呆の子、広崎 大和。女子生徒は2―3屈指の頭脳を持つ山岡さんだ。

伝説の木の下に立ち、雄々しく立ち尽くすそれを見上げていた彼女は、不意に此方に近付く騒がしい足音に気が付いた。言うまでもなくその足音の主は大和である。

「……あ、広崎くん。早かったね」

「待たせたら申し訳無いと思って、手紙見てすぐに走ってきたから」

その言葉の通り、大和は此処まで全速力で駆けてきたのだろう。額にはうっすらと汗が滲み、美穂の指導のもとしっかりと着こなされていたはずの制服には若干の乱れが窺えた。

山岡は大和の真摯な対応にはにかなだ。

そして、それを見つめる瞳が四対。

「……山岡さんにそういう感情があつたっていうのは薄々感付いてたけど、告白の場所、此処かよ……」

そう呟いたのは宮城だった。

伝説の木の言い伝えは学園中に知れ渡っている。よもやこのような場所で告白をするような奇特な人間は滅多にいないであろうから、宮城の反応は至極正しいものだと言えるだろう。

「くっそう、広崎、羨ましいなあ……」

恨めしげに低く言葉を吐き出したのは大和らと同じクラスの男子生徒、笹谷だ。美穂はきょとんと笹谷を見つめた。

「なに、笹谷くん、山岡さんのこと好きなの？」

美穂の問いに笹谷は顔を真っ赤に染め上げた。ああ、わかりやす

い。笹谷以外のその場にいた人間の心が一致した。

笹谷は照れを隠すように視線を美穂から大和たち二人に移した。しつこく、ねっとりとした視線をこれでもかと浴びせる笹谷。感じた悪寒は気のせいではないぞ大和。

「大和くん、告白、受けちゃうのかなあ」

眉をふにやりと下げ、ひっそりと言ったのは小百合である。

千切れそうなほどにか細いその声は、宮城の心を抉るには十分過ぎた。

やはり、普段は普通の友人のように接しているとはいえ、あれほどまでに熱く燃え上がった恋情がそう容易く消えゆくわけがない。

小百合の心は、依然として大和に在るのだ。

己の大切な親友であるはずの大和が、今だけは酷く憎らしく思った。

「っ、ごめん！」

（（えっ！？））

今度は笹谷も含めた皆の心が一致した。今のは確かに、大和の謝罪の声だった。ということは、大和はもう山岡に告白をされてしまったのだらうか。

わざわざこんなところまで全員が全員、仲が良いわけではない四人で連れ立ってきて、そうして一番気になるところを見逃した。い

つたいこいつらは何をしているのか。

しかし、当然のことながらこんな馬鹿四人組を大和たちが気にしてやるわけもなく、話は進む。

「俺、山岡さんのことは、そういう意味じゃ好きになれない」

申し訳なさそうに、だけどはっきりとそう言う大和。此処で見せる優しさは同情といい、ただ人を見下すだけのものであり、酷い侮辱だということを大和は知っていた。

こんな阿呆であれど顔は良いのだ。告白の機会は今回以外にもあった。過去の失敗から、大和は学んだのだった。

山岡はすつきりとしたような面持ちで大和を見返していた。

「うん、知ってるよ。だから、こんなところで告白しようと思ったの」

「伝説の、木」

大和が掠れた声で呟く。山岡は寂しそうに微笑んだ。

「やっぱり、知ってたんだ」

「うん、有名……だし」

そう、とそれだけ言って、山岡は黙り込んでしまった。大和も同

様に。

そしてその様を固唾を吞んで見守る馬鹿四人組。
暫くして、口を開いたのは山岡からだった。

「……きっぱりふつてくれてありがとう」

「うん」

「最後にね、お願いがあるの。……良い？」

自分に出来ることならば、と大和は快諾した。

此処で、よもや恋愛には欠かせない王道イベント“まうすとうま
うす”が起きるのではないかと危惧している三人がいた。笹谷と美
穂と小百合だ。

宮城だけは頬を紅潮させ、そんな小百合を見つめていた。心境を
一部公開するのならば“心配そうな小百合滅茶苦茶可愛いでも大和
ム力つく”といったところだろうか。此処最近宮城の中には小百合
への恋慕と大和への憎しみが混在していた。

「頭……、撫でてくれる？」

頬を薄い紅色に染め、不安そうに大和を窺う山岡。笹谷は鼻血を
噴いて倒れていた。

山岡のような大人っぽい女の子の“最後のお願い”がまうすとう
まうすなどではなく、頭なでなで。

ギャップ萌えである。寧ろ山岡さん胸キュンなのである。

「ぐああああ！！ 憎い！ 広崎が憎い！ 離せ宮城！ パラパラを踊りながらどさくさに紛れて広崎を殴りにいつてやる！！」

愛しの大和に最後に頭を撫でられ、至福の時を過ごす山岡。その横で大和への憎しみと山岡への愛に悶え苦しんだ男がいることは、馬鹿四人組しか知らない。

大和と山岡さん + α (後書き)

何故か今さら新キャラ登場。

笹谷くんは山岡さんに恋するお馬鹿な男子生徒です。

小百合と宮城 1

宮城は正直小百合のことが嫌いだった。

男に媚びるような仕草、声、顔。極めつけには自分の大切な親友をたぶらかし、宮城の心に大きな傷を負わせた。
だが、

「あ、あの、宮城くん……」

今、宮城の目の前にいる女は、いったい誰だ？

「ごめんなさい、わたし、謝っても許されないようなことを……
！」

常に自信に満ち溢れていた瞳は失せ、今は罪悪からか、涙に濡れている。

華美なあの姿は見る影もなく、素朴で、素直に可愛いと思えるような姿。

ぶっちゃん、宮城のタイプなのだ。

「……いや、許すよ」

だから、宮城はついつい小百合を許すと口にしてしまった。いつの時代も、男は女に弱いものである。

というわけで、宮城は現在自己嫌悪に陥っているのである。

勢いで大和に今の小百合がタイプなどと口走ってしまった宮城であつたが、後からそれはいったい人としてどうなんだと我に返つたのだ。

結局、自分も前の小百合に溺れていた馬鹿共と変わらないのではないか、と。

大和にその主を打ち明けたところ、

「好きなら好きで、別に良いんじゃないか？ 俺はお前の恋路まで邪魔する気はないよ」

と実にあつさりとした答えを返された。彼処まで悩んだのはいつたいなんだつたのだと宮城は理不尽にも大和に殴りかかったが、そのときちょうど大和の傍にいた本多に何故か返り討ちにされた。

あの日以来、本多は大和になんとなく過保護だ。

「どうしてお前は此処にいるんだハゲ」

「理由がなくてはお前に会いに来てはいかんのか！！」

「俺の彼女気取りか。気持ち悪いぞお前」

大和にはつ倒された本多を横目に、宮城は考えた。

宮城が小百合を好いてしまったことについて、大和は特に何も思っていないようだ。本多や美穂といった面々も、大和が何も言わないのならば自分が可笑しくならない限り、何も言いはしないだろう。そして、今の小百合は事実上大和にふられ、傷心中。

（あれ……？）

宮城はふと、ある重大な事実気付いた。

（今、俺めちやくちやチャンスじゃね？）

そして、宮城の小百合への猛アタックの日々が始まるのである。

小百合と宮城 1（後書き）

続くはず。

宮城のタイプは素朴な女の子です。私のタイプは和風美女です。

逆ハーっ子 で バトロワパロディ（前書き）

私といちのさんの会話と悪ふざけから生まれた産物。

私の違う作品からゲスト出演としてカイト・リーブルきゅんが登場。
結構可哀想な扱いになるはず。何処でも可哀想ね、この子は。

逆ハーっ子 で バトロワパロディ

「……ん、……」

「やっと起きたか、広崎」

自身を呼ぶ声とそれに連動した揺さぶりで、大和は重い瞼をゆつくりと上げた。

寝起きのせいではやけている視界が時が経つにつれ徐々に鮮明になっっていく。

見覚えのある端正な顔。窓やドアの閉め切られた見慣れた教室。緑色の黒板に、白いチョークで日直の名前が書かれている。

此処は、何処なのだろうか。頭がぼんやりして、考えが纏まらない。

冷たい床にいつまでも横たわっているのは身体が痛い。大和は上体を起こし、手で額を押さえ、眠気を追い払うように頭を振った。

「……学、校……？」

大和はやつと覚醒し始めた頭で、疑問の答えを自らで弾き出した。大和の呟きに、二階堂が頷きで応えた。

「そうみたいだな。……お前、昨日何か変わったこととかあったか？」

「変わったこと……」

昨日の記憶を呼び起こすも、特になんの変哲もない一日だったと大和の頭は記憶している。

いつも通りの朝を迎え、いつも通りの学校生活を過ごし、いつも通りに布団に入り、就寝したのだ。変わったことなど、一つもない。その主を二階堂に伝えると、何処か諦めの入り雑じった表情で小さくため息を吐いた。

「そうか……、やっぱりな。俺たちもだ」

「俺たち、も……？」

大和が問うと、二階堂は周りを見てみろとでも言うように顎で大和の視線を促した。

其処には、見覚えの有りすぎる顔ぶれが揃っていた。

青山や松島がいる。宮城も美穂も小百合も。本多と菖蒲と夏輝の三人もいた。二階堂以外にも釜元かまもとや音波おとばといった教師がいた。

そして……、

「あ、夫婦と空気」

「「夫婦って呼ぶな!!」」

「誰が空気だ!」

いつぞやの生徒会二人に、書道部の若と呼ばれる日野宮までもがいた。

いったいこの人選はどういったことなのか。そもそも、何故自分たちは此処に集められたのか。

これから、いったい何が始まるうとしているのか。

大和は柳眉を顰めた。二階堂も不可解だと顔を歪めている。

「っだあー！」

そんなとき、美しいアルトの声が大和の耳を劈いた。^{つひ}

喧しいそれに何事かと視線をその方にやれば、頭を抱えた夏輝がいた。横には同じく頭を抱える本多に、その二人を宥める菖蒲がいる。

「やっぱり駄目！ 開かないってこれ！ どうなってんだよお！」

「な、夏輝、落ち着いて……」

「しかし……、どうしたものか。いつまでもこのままというわけにもいくまい」

三人は何故か窓の前でうんうんと唸っている。次いで、ドアのほうでも奇声が。

「むーかーっくーっ！！ 開けてば馬鹿ー！」

「駄目だ、このドア。坂田先輩並みにム力つく」

「ドアの前にあんたたちを壊しても良いかな」

ドアをなんとか外そうと奮闘する松島。青山は一発ドアに蹴りを入れてから悪態をついた。美穂は青筋を立てている。

「ドア窓も開かないみたいだね……。小窓も開かないし……」
「鍵は開くのに、なんで扉は動かないんだろうな……」

小百合と宮城は疲れ切った表情でふう、と息を吐いた。

大和はその不思議な光景たちがいったい何を示すのか、ようやく気付いた。

顔は緊張か不安でか、高ぶった興奮のせいで熱いのに、手足の先だけが異様に冷たい。

「閉じ込められて、いるのか……？」

「、……ああ」

二階堂が重々しい響きで肯定した。

「状況を、整理しよつか」

音波が皆を安心させようと明るいう口調で黒板の前に立ち、チョークを握った。

よく見れば音波が握っているそれ以外に、チョークは一本もない。黒板に丸っこい綺麗な字が綴られていく。

「まず、此処は学校である、と」

「ああ、“恐らく”って付け足しとけ」

二階堂が言った。音波は不思議そうな顔をしながらも素直に従った。

「俺たちは今閉じ込められてる。この敷地内の全部を見て回ったわけじゃないのに此処が“学校”だって決め付けんのは、早計すぎねえか？」

知った場所への監禁などではなく、何処か全く違う場所への誘拐という線も捨て切れない。二階堂はそう締め括った。釜元は、実は自分もそう思っていたのだとほざく。

二階堂は音波の手から些か強引にチョークを奪い取り、“監禁、若しくは誘拐”と書き足し、チョークを返した。

「ええっと……、ドアと窓は鍵もかかっていないのに何故か閉まっている」

「机や椅子で叩いても、ビクともしなかったッス」

それに青山が言葉を付け加えた。

夏輝や松島らがその言葉にうんうん頷いていた。

大和はよくわかっていないのに訳知り顔で、何故かあったみかんを咀嚼しながら同じように頷いてみせた。それを見た二階堂が不思議そうな顔をしていた。

「それで、私たちに“これ”の前触れのような可笑しなことは全くなかった」

そう、何も無かったのだ。ただ一つとして。

だというのにこんな状況に置かれているのは、何が原因なのだろうか。大和はみかんの皮をゴミ箱に投げ入れた。外れて越戸にあたった。

越戸は突如として自分の頭の上から降って湧いたみかんの皮に恐れ戦おののいている。奥はそんな越戸を何か汚いものでも見るような目で見つめていた。

「どうでも良いことかもしれないが、」

若干空気と化していた日野宮がそう前置きしてから口を開く。自分に一斉に集まった視線に少し居心地が悪そうだ。

「僕たちは、一つも自分の私物を持っていないのだな」

そういえば、と皆が自分のポケットの中などを探り始めたが、収穫は一つもなかった。

口寂しいからと煙草を吸おうとした二階堂だけは既にそのことに気が付いていたので頷くだけに留まった。

ティッシュやハンカチさえも得られなかった大和は少しだけ肩を落としたが、思い出したように言った。

「俺はみかんがあつたけど、」

「それは貴方の“私物”なのか？」

みかんを常備している人間など早々いないだろう。大和が口にしていたみかんは、きっと大和自身が持っていたものではなく、此処に大和たちを連れてきた人間が大和に持たせたものなのだろう。

まあ、みかんがあつた理由はどうでも良いとして、どうしたら大和たちは此処から脱出できるのか。

何処か殺伐とした雰囲気の中で討論を交わしていると、それを何者かが遮った。

「悪い！ 遅れちまった！」

逆ハーっ子 で バトロワパロディ（後書き）

物凄く馴れ馴れしい。

何をしてもビクとも、そもそも傷一つすらつかなかったドアがすんなりと開き、見覚えのない人間が教室に酷く慌てた様子で足を踏み入れた。

中々馴れ馴れしい口調だが、誰かの知り合いなのだろうか。そして、大和たちを救出しに来たのだろうか。

二階堂はそう思い、皆を振り返る。

「……誰の知り合いだ？」

「……俺は知らない」

真っ先に答えたのは大和だった。それを皮切りに皆が口々に知らないと言う。

なら、この少年はいったい誰なのだろうか。

「あ、オレ、カイト・リーブル。よろしくな！」

「あ、うん、よろしく」

何故か握手を求められたので素直に応じる大和。調理部メンバーと美穂が全力で引き剥がした。

今までのストレスが猛烈な怒りと化して爆発したのか、釜元が顔を真っ赤にしてこの事件に首謀者であろうカイトと名乗る少年に掴みかかるうとしたときであつた。また新たな人物が現れた。

「もうっ！ カイト！ 置いていかないでよ！」

「そんなに急がないでも閉じ込めてあるんだから、誰も逃げたりなんてしないでしょ」

光り輝く美しい金髪を持った少女と、何処か副会長に似たキャラづけの銀髪の少年だ。

「あ、リン、リーダー。いや、でももしかしたらもう殺し合いしてるかもって思ったら……」

「殺し合いだと!？」

カイトの口から飛び出した物騒な言葉を聞き、今まで存在感が皆無だった越戸が叫んだ。

“殺し合い”。正常な日常生活を送っているのであれば、そうそう聞く機会はない単語だ。

薄く警戒心をその顔に乗せていた宮城だったが、それを聞いた途端に鋭くカイトたちを睨みつけた。

「……なんで外国人がこんなところにいるのか知んねーけど、これ、どう考えたって犯罪だぞ」

「犯罪？」

金髪の少女、リンが宮城を見つめた。かつての小百合のような美しさに、思わず嫌な記憶が蘇りたじろぐ宮城だったが、すぐに持ち直した。

「あ、当たり前だろ。誘拐に監禁。立派な犯罪だ」

気丈に振る舞いながらも余りの非現実的な出来事に宮城の身体は僅かに震えている。気遣うように小百合が宮城の腕に触れた。

リンは少しだけ不機嫌そうな顔をしてリダーを見た。その視線を受け、リダーが掌を天に向ける。

いったい何をするつもりなのかと本多は身構えた。

「カイト、大切なこと、忘れちゃ駄目でしょう」
「え？ あっ！」

疑問符を浮かべるカイトにリダーは苦笑して呪文のようなものを唱え始めた。

その瞬間、大和たちの首元に銀色の首輪がとぐろを巻いた。

「うわっ！？」
「きゃ、！」

突如として現れた首輪に、各々様々な反応をする。釜元だけ首輪がワンサイズ違ったのか、顔に先程とは違った赤みが差してきている。

赤黒くなった怪物にドン引きしながらもすぐにサイズの調節をするリダー。

「……これは、なんなんだ？」

今まさに命の危機に瀕していた釜元には目もくれず、二階堂は力イトたちを見据えた。

よくぞ訊いてくれた、とカイトは得意げに言い放った。

「それは爆弾が仕掛けられた首輪だ！」

「ば、爆弾！？」

日野宮は少女のような花の顔を恐怖に歪めた。音波は声も出ないようだ。不思議そうに首輪を弄繰り回していた夏輝は真っ青になつてすぐに手を離れた。

「っとうして爆弾なんかを取りつけられなくちゃ……！！」

「まずは黙って俺たちの話を聞け。文句はそれから受け付けてやるよ」

叫んだ美穂をカイトが制止した。

これが殺気といわれるもの、なのだろうか。ぴりぴりと肌を刺すような感覚に、感じる異様な威圧感。大和はごくりと唾を飲み込んだ。

「えーと、今からお前らには殺し合いをしてもらう」

につこりと輝かしい笑顔で吐き出された残酷な言葉に、誰もが固まった。奥が僅かに後退りする。机に足が当たり、ガタ、と音がした。

皆の怯える姿に満悦そうに笑んだリンは人差し指をぴんと立てて言った。

「ルールは簡単！ その言葉の通り、最後の一人になるまで殺し合ってもらっただけ！」

「あと私物は没収させてもらいました。色々と公平にやりたいので」

大和たちの私物が何一つとしてなかったのはこのせいだったのだ。釜元はなるほど、と納得したように頷いた。三週間ほど現在進行形で入れっぱなしにしていたハンカチがないわけだ。

「それでなんにもなしに殺し合いつていうのはきついから、食料、水、武器となるものはこっち側で用意した」

カイトはそう言って何処から出したのか、リュックサックのよう

なものを掲げてみせた。そして中から水と乾パンを取り出す。それに大和がキレた。

「ふざけるな！！ 乾パンなんて食べたなら口の中がからになるじゃないか！ せめて煎餅にしろ！！」
「そういう問題じゃないと思うぞ」

二階堂が呆れたように大和の頭をはたいた。

「そうか、わかった。お前のリュックに入ってる食料だけは全部サ
ラダ煎餅に変えておくから」
「変えてくれるんだ」
「よし！」

妥協案を受け入れてもらった大和は満足そうだ。
しかし、そんなお気楽な大和とは違って、皆は一樣に不安そうな顔をしている。菖蒲や小百合など、元来気の強いほうではない者は今にも泣き出してしまいそうだ。

「……武器って、こういうことなんスか」
「な、ナイフ、とかー？ そういう危ないもの……？」

青山と松島が互いの身体を支え合いながら真っ青な顔で呟いた。
肯定するようにリダーが微笑む。ひ、と二人は息を呑んだ。

「あ、言い忘れてたけど、爆弾はこの学校の敷地外に出たとき、殺し合い（ゲーム）の妨害をしたとき、俺たちに逆らったときに爆発する仕組みになってるから」

そこんところしく、と何処までも軽い口調でカイトは言う。

ゲーム、と美穂は心中で呟いた。この少年たちは自分たちの命をまるで実在しないようなものとして見ているのだ。だから、こんなにも軽く、残酷なことを口に出来る。

「じゃ、名前呼ぶから呼ばれた奴は俺たちのところ来いよ」

「リュックと武器を渡しますね」

二人の少年は笑んだ。

2 (後書き)

ギャグギャグしいバトロワ。

3 (前書き)

誰にも需要ないだろうにめちゃくちゃ楽しい。

「えっと……、ひろ……？ ひ、ひろ、ひろひろ」

「鳥の鳴き真似か！？ 多分貴様よりも俺のほうが得意だぞ！ 手本を見せてやるうか！」

「黙れ鳥頭」

日本語が読めないのか、何度も“ひろ”を繰り返すカイト。それを見た本多が意味のわからない勘違いをし、大和に張つ倒された。

大和はカイトが手にしていたメモのような紙を覗き込み、代わりに読み上げてやった。

名前はローマ字で表記されていた。

「えー、“ひろさきやまと！” 俺かー！！」

「あなただったの？ はい、じゃあ、これ」

リンは大和に水とサラダ煎餅が入ったリュックを手渡した。しかし、武器らしきものは配布されない。

大和は別に武器を手にし、級友や後輩、今まで世話になってきた恩師と殺し合いたいわけではないが、少し不思議に思った。

それを察したのか、リンが言った。

「武器は武器の名称と使い方が書かれた紙と一緒にリュックの中に一緒に入ってるわ。この袋の中、四次元だから、袋の口に入るような大きさだったらなんでも入れられるの」

「へえ、便利だな」

リンと大和がほのぼのとした会話を繰り返している中、覚束ない日本語らしき言語で次の名が呼ばれた。

「……さ、さかんだみほ」

「デカンタみたいに言わないで下さいよ」

美穂は文句を言いながらリーダーからリュックを受け取った。

「にきゃんどつ……？」

「二階堂な」

「青山」

「俺の名前の発音だけなんか綺麗ッスね」

「まちゆしま」

「なんかキユンとしちゃったじゃないですかー」

「なちゅき」

「君、“つ”が言えないの？」

「あやめ」

「は、はい……」

「ハゲ」

「俺だけ間違い方が可笑しいだろう!!」

「……こ、こし、ど」

「越戸だ！ おっと！ 俺様の名前の読み間違っ
てんじゃねえか！
！」

「奥さん」

「死ね!!」

「……？ ひによや」

「日野宮です」

「み、み、……みや、みややき」
「み・や・ぎー！」

「ちゅばき」
「……はい」

「おんぱ」
「……おとは、ね。おとは」

「きやみやもと」
「人の名前を間違えるとは何事か！！」

八割方間違えられながら全ての者の名が呼ばれ、全員にリュックが行き渡った。釜元は自分の命がかかっているということ以待ち切れなかったのか、リュックを渡されてからすぐにリュックを開け、中を漁った。

それを見て、大和もリュックを漁ってみると、かさりと音がした。感触的に紙が手に当たったようだ。

ああ、そういえば武器の名称などが書かれた紙も入れていると言っていたなと思い出し、それを取り出す。

「えーっと、なにになに……？」

武器・みかん

使い方・お腹すいたら食べてね。

「おいさつき俺みかん食べたぞ！！」

「あ、大丈夫です。あなたのみかんは無限に出てきます。ただし、一つずつしか出せませんけど」

「良かったな。リュックさえあれば水分も食料も手に入るぜ」

「なんか部長だけ優遇されてないッスか」

ぼそりと呟いた青山。松島にだけその声は届き、密かに頷いた。

二階堂はあとで大和にみかんを貰おうと考えながら、横目に打ち震える釜元を捉えた。いったい何があったのだらうと釜元をしつかりと見てみると、その手に握られていたのは、

「せ、洗面器……？」

「……あれ、オレ、そんなの入れたっけなあ……」

カイトが首を捻る。自分も覚えがない、とリダーがリンを見た。

「リンですか？」

「あ、うん。殺し合い中と言えど身嗜みは気になるでしょ？　まさか中年に当たるとは思わなかったけど」
「ああ、そういうことですか。ははっ」

そんな暢気な会話を耳に入れてしまった釜元は、今度こそその怒りを爆発させた。

「ふ、ふざけるな！　これで私に風呂に入れと言っのか！！」
「えー。そんなサービスショットいらねえから良いよ」

カイトが何処か外れた返答をする。しかし、おっさんのセクシーショットなど誰も見たくはないであろうからある意味正解である。

「き、貴様あああ！！」

釜元は叫び、カイトに掴みかかった。突然のことに少しだけ目を白黒させていたが、すぐに不快感を整った顔に浮かべた。

「聞いてなかったのかよ。逆らうなっつたろ」

冷酷な響きの音が落ちた。
悲鳴もなく、釜元は巨大な爆発音を立て、消え去った。
血煙りが、舞う。肉片がべちゃりと閉め切られた窓に当たり、ず

る、と嫌な音を立てながらゆっくりと滑り落ちた。

何が起こったのか、誰一人として理解出来なかった。

3（後書き）

あれだけ出張ってたくせにきやみやもとは今回初めて喋りました。そして初めて喋った回で死にました。でもキャラの扱いはだいたいこんなんで合ってると思う。

私は自分で作ったキャラは我が子のように愛しますが、他人の作ったキャラは割とどうでも良いです。でも釜元は何気お気に入り。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1867y/>

逆ハーっ子 が あらわれた！（仮） 番外編

2012年1月14日22時55分発行